



タイ王国 派遣期間 2014年4月～2017年3月

# シラチャ日本人学校 帰国報告

帯広市立帯広小学校 教諭 合田 真晃



## I はじめに

“シラチャ”と聞いていったいどれだけの人が「ああ、あそこね」と正しくイメージができるだろうか。もっと言うと“タイ”と聞いても「国の名前は知っているけど・・・」という人が相当数いるというのが実態なのではないだろうか。余談になるが、帰国後に同僚から「向こうではわらの家に住んでいたの？」と半分真顔で質問され絶句した記憶があるが、この国のことに関しては、それ程までに正しい認識がなされていなかったりする、というのが私の周りにいる人々の現実である。かくいう私もその口で、当時の校長に「赴任先がシラチャ校に決まった」と言われて「アフリカのどこかな？」とってしまったようなあり様で、タイについてもシラチャについてもほとんど予備知識がないままでの赴任であった。

実際のタイは、“微笑みの国”と言われるイメージそのままの温かい人々、途上国のイメージとは大きくかけ離れた近代的な大都市と日本の昭和時代を感じさせるような古い町並みとの混在、西洋文化とタイ古来の文化とのエネルギーッシュな融合などなど、懐が深く底が知れないほどの魅力に満ちた国であった。今回のレポートでは、あくまでも私の感じた私見ではあるが、この素晴らしい国や現地での教育について少しでもお伝えできればと思っている。



## II 派遣国について

### 1. 概要（参考：『タイ国政府観光庁HP』）

- 東南アジアの中心に位置し、首都はバンコク。（ちなみにバンコクというのは英語名で、タイ語名の正式名称は、「クルンテープ・マハーナコーン・アモーンラッタナコーシン・マヒンタラーユッタヤー・マハーディロック・ポップ・ノッパラット・ラーチャタニーブリーロム・ウドムラーチャニウェートマハーサターン・アモーンピマーン・アワターンサティット・サッカタッティヤウィサヌカムプラシット」である。この正式名称は世界一の長さと言われ、邦訳すると「イン神（インドラ、帝釈天）がウィッサヌカム神（ヴィシュヌカルマ神）に命じてお作りになった、神が権化としてお住まいになる、多くの大宮殿を持ち、九宝のように楽しい王の都、最高・偉大な地、イン神の戦争のない平和な、イン神の不滅の宝石のような、偉大な天使の都。」という意味となる。さすがにこの正式名称は長すぎるため、タイの人たちも普段は冒頭部の“クルンテープ”のみを使って呼ぶことが多い。
- 国土面積は約51万4千平方kmで、日本の約1.4倍。
- 西はミャンマー、北はラオス、東はカンボジア、南はマレーシアと国境を接する。



- ・人口は約6900万人（2016年）。
- ・民族的には、タイ族が約85％、中華系が10％、その他モン・クメール系、マレー系、ラオス系、インド系が暮らしている。山岳部にはそれぞれの文化や言語をもった少数民族（モン族、カレン族など）が暮らしている。

## 2. 気候

タイの気候は熱帯性で雨季と乾季と暑期があり、気温は平均して30℃前後。北海道生まれで北海道育ちの私から見れば、年中真夏そのものといった感じである。そんなタイでよく笑い話として話されるのは、「タイにも季節がある。“暑い季節”と“もっと暑い季節”と“一番暑い季節”だ。」というもの。実際、3月から4月は1年の中で最も暑い暑期であり、気温は35度～40度近く。タイの学校はこの時期（3月半ばから5月半ば）が夏休みとなる。雨季の始まりは5月くらいから。タイに行くまでは“雨期”というのは日本の梅雨のようなもので、毎日半日から丸一日ずっと雨が降っているのだらうと想像していた。しかし実際の雨期はそんな想像とはかけ離れたものであり、真夏の太陽が照りつける気持ちの良い天気の中を、急に黒い雲が空を覆って湿気を含んだ空気が街中に漂い始め、突然ザーッと大粒の激しい雨（スコール）が降るといった感じのものであった。その降り方たるやすさまじいもので、本当にバケツの水をひっくり返したかのような激しさなのだが、30分から1時間程度で、まるで何事もなかったかのようにピタッと止んでまた青空が戻ってくるという、“今日は雨の日”という長い時間振り続ける雨に慣れている日本人にとっては、なんとも不思議な感じのものであった。そんな雨期は10月まで続き、11月～2月は乾期となる。乾期になると見事なまでに雨は降らず、北海道の真夏を思わせるような爽やかな毎日が続き、観光をする上では正にベストシーズンとなる。この乾期には、朝晩は20度前後になることも多いのだが、タイの人は真剣に“寒さ”を感じてしまうようで、ショッピングモールなどに行くと、日本で真冬に売られているようなものが店頭に並んでいたりもする。（右はタイのユニクロの様子。純粋な防寒のためなのか、それとも冬物に対するあこがれやファッション性のためなのか、こうしたダウンジャケットなどがしっかりと売れ、また実際に着用している人も多く見かける。）こういった季節の変化は、赴任した1年目は全くわからなかったのだが、3年目ともなるとしっかりと感じられるようになり、防寒着こそ着ないものの、「乾期になって寒いね～」などと言ってしまふ自分もいるのだから、人の慣れというのは恐ろしいものである。



## 3. 文化的背景

タイは東南アジアでは日本を除いて唯一他国からの植民地支配を受けていない国である。ちなみに近隣国は、フィリピンはスペイン、インドネシアはオランダ、カンボジア・ベトナム・ラオスはフランス、インドやマレーシアはイギリスの植民地支配を受け、それぞれの国の文化に色濃くその影響が見られる。しかしタイは前述した理由もあり（西洋文化の流入などによる影響は当然あるが）、タイ独自の考え方や信仰、礼儀などが人々の生活や心の中に深く根付いている。その独自の文化は、タイがインドシナ半島の中央に位置する国であり、古くから東西貿易の拠点となっていたことなどから、インドや中国からの影響を受けながら育まれてきた。インドの仏教、王制、官僚制度などの宗教・思想・政治に関する文化、中国の陶磁器や食文化などの生活に関わる文化と、もともと息づいていたタイならではの気候風土を背景とする生活様式や精霊信仰（アニミズム）の文化とが融合していったのである。

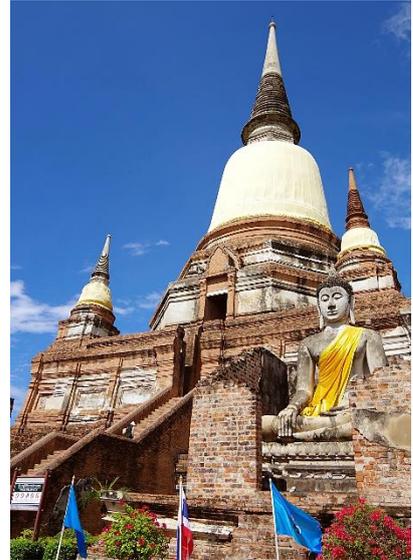
## 4. 宗教

タイは仏教国である。タイ国の憲法では信仰の自由が保護されているが、タイの宗教といえば「仏教」であり、統計的には国民の94%が仏教を信仰している。その他、イスラム教、キリスト教、ヒンドゥー教などを信仰する人もいる。仏教を信仰する人が多いという点では日本と共通するタイであるが、実際に感じたのは、日本よりも深く仏教が生活に根付いており、人々もその教えに沿って生きているということである。

### (1) 上座部仏教

そもそもの仏教の考え方は、「人の一生は苦であり、永遠につづく輪廻の中で終わることなく苦しみを負うことになる。その苦から抜け出すことが解脱である。」というものである。また、「修行を積むことで解脱することができる」とも考えられており、だからこそ修行を積んで解脱を目指すことが仏教の目的であった。その仏教本来の教えに忠実なのがタイなどの国で広がる“上座部仏教”である。

一方、自らが修行をせずとも、「修行したものが教えを説くことで悟りを得られる」という考え方なのが日本などに伝わった“大乘仏教”であり、同じ仏教であってもその考え方は実はかなり大きく異なる。そんな違いがタイの人の仏教に対する思いの強さに結びついているように感じた。



### (2) タンブン

タイの日常風景の一つに“托鉢（たくはつ）”がある。托鉢なんて昔話や『一休さん』の中でしか見たことがない私にとって、これはなかなか衝撃的な光景であった。しかも何か特別なイベントがあるときに見られるとかいうものではなく、本当に毎日の当たり前の



光景として見られるのである。私が学校に通う通勤経路でもそれは同じで、毎朝お坊さんの姿を見かけると共に、そのお坊さんに施しをする人の姿を必ず見かけた。コンビニの前で、屋台の前で、住宅の前で…、人々は当たり前のように履き物を脱いで地面に跪き、施しを行っていた。中でもよく見かけたのは幼い子ども連れの親子が施しを行う姿で、きっと我が子への大切な教育のひとつであり、そうやってタイの人たちの仏教感ができあがっていくのであろうと想像している。

タイの人々のこうした行いの根底には“タンブン”という考え方（タンブンは、「徳を積む」ということ）がある。タイの人は輪廻転生を信じており、タンブンをすればするほど来世は幸せな人生に生まれ変わることができると考えているため、日々のタンブンを重ねることで幸せになろうとしているわけである。タンブンの中での最大の行いは自らが僧侶として出家することであり、その他にも、“お寺に寄付をする”“僧侶に托鉢する”“息子を出家させる”“小鳥や魚を逃がしてあげる”などがタンブンの行為となるという。そのため、例えば、日本人だとお寺に行くのはお墓参りの時だけという人も多いと思うが、タイでは毎週欠かさずお寺に通う人も多い。

### (3) 仏暦

仏教国のタイでは、仏暦と西暦の両方が使われている。仏暦はお釈迦様の入滅を基準として作られており、西暦よりも543年長い。よって2017年である今年タイでは仏暦2560年ということになる。タイでは食品の賞味期限にも仏暦が使われている場合があり、最初は多少の戸惑いもあったが、慣れると特に困ることはない。また、祝日にも仏教関係のものが数日あり、主な仏日は国としての禁酒日にあたる。

### III シラチャについて

#### 1. 漁村からの変貌



シラチャはそもそもはタイの小さな漁村である。しかし、一説によると今は“世界一日本人が密集する町”となっている。（現地の日本人会の情報によると、現在は1万人ほどの日本人が居住しているということである。）いったいなぜそのような変貌を遂げたのか。それはシラチャの隣町にできたレムチャバン港の影響によるところが大きい。

レムチャバン港は1991年に建設されたタイの国際貿易港である。それ以前はタイの首都であるバンコクにある港が主な貿易港であったが、水深が浅く近年の大型コンテナの輸送に適していなかったために新しい港が必要となって建設された。1997年以降は国内最大の貨物取扱量の港となり、国際的なコンテナ船のほとんどはこの港を利用している。港には鉄道や高速道路も直結しており、その利便性ゆえに周囲の工業団地が急速に発展している。近隣の工業団地は“東洋のデトロイト”とも言われ、三菱、マツダ、スズキ、いすゞなどの日本メーカーはもちろん、フォードやGM、BMWなども進出している。また、日産やトヨタの関連工場などの自動車関係の工場の他に、電機メーカーや食品メーカーなど、膨大な数の日系企業が進出している。

そんな日系企業で働く駐在員やその家族、また現地採用者などが集まるようにして暮らすのがシラチャの町である。またさらに、日本人が多く住んでいるということで、その日本人を相手にした商売をするためにタイ人や日本人が集まってくるようになり、本当に急激に町が大きくなったわけである。

#### 2. シラチャにあふれる「日本」



左の写真は“Jパーク日本村”，右下は昨年オープンした“イオン”である。どちらも大型のショッピングモールであるが、前者はそのつくりを江戸時代の日本をテーマにしており、日本庭園のような中庭や金閣寺のような建物から構成されている。後者は品揃えやテナントも完全に「日本」にこだわり抜いている。どちらのスーパーへ行っても当然のように日本の食材が扱われ、日本のお米やお酒、醤油や豆腐、納豆

にいたるまでが本当に簡単に手に入る。また、町には日本食のレストランや居酒屋も豊富にあるため、「日本食が恋しい」という、海外生活をしている人特有の飢餓感は無さしいといえる。その他、100円ショップのダイソーやツルハドラッグ、漫画喫茶や豚丼専門店などもあり、タイの人たちにも愛用されている。



シラチャでやや不足気味だったのは、日本人のニーズに合った安全性を満たし、家族向けの部屋数を有する住宅である。当初は単身赴任や出張ベースでの滞在という形が多かったシラチャだが、本格的に企業進出が続くに伴って家族そろって全員での赴任が増えてきたため、圧倒的に住居が不足してしまったのである。我が家も5人家族での赴任であったが、1年間は3人の子ども（中1女、小5男、小1男）がシングルベッドを2つ寄せ合った1部屋で1年を仲良く(?) 過ごすことになった。しかし、ニーズあるところに商機ありで、私が赴任している3年の間に状況は一変する。日本人のニーズに応えるコンドミニアムやアパートメントが次々とできあがっていったのである。その勢いたるやすまじいほどのもので、感覚としては正に“バブル景気”そのものである。日本のようにバブルがはじけてしまわないように願うばかりだが、帰任の頃には「やや過剰供給かな?」と思うまでにたくさんの住宅ができあがった。中でも驚いたのは東急グループが開発した住宅街（右の写真）で、なんと学校の目の前の敷地におよそ200世帯分の住宅ができあがってしまったのである。しかも、ユニットを運んできて組み立てていくという工法であったため、整地が済んだかと思うとそれこそ何十台もの大型トレーラーがユニットを運んできて、あっという間に大きな“町”ができいった。住宅街の中は純日本風に造られているため、灼熱の太陽とそれに付随する暑さ以外は本当に日本にいるのではないかと錯覚してしまうような光景であった。今後、たくさんの日本人家族を相手にしたサービスが近隣に広がり、さらに大きな変貌を遂げていくことが予想されている。



### 3. シラチャ日本人学校

#### (1) 学校の概要



シラチャ日本人学校は2009年(平成21年)に設立された、まだ開校から10年を迎えていない新しい学校である。学校の前身はシラチャ・パタヤ補習授業校で、週末の運営のみであったが、日本人の増加によって日本語で学習ができる環境を整えてほしいという声が大きくなり、地元のチョンブリ・ラヨン日本人会の方々の熱意と努力によって設立が実現した。在タイ中には日本人会の方から何度も開校に関わる話を聞く場面があったが、異国に学校を

設立するということに対するエネルギーの大きさにはただただ脱帽させられるばかりであった。タイの法律では外国人や外国法人による学校の設立が認められていないため、以前からあったタイと日本の友好親善協力団体である泰日協会が学校設立の母体となっており、それ故に学校の名称は『泰日協会学校シラチャ校』というのが正式名称となっている。泰日協会は世界の中で最も長い歴史を有するバンコク日本人学校の設置者でもあるため、バンコク日本人学校とシラチャ日本人学校は姉妹校という位置づけになる。



## (2) 児童生徒・教職員

赴任最終年度であった平成28年度の児童生徒数及び教職員数は以下の通りである。

☆児童生徒…412名 教職員…35名 学級数…17クラス

児童生徒の在籍数は開校当時から右肩上がりで増え続けている。ちなみに開校当時（平成21年度）の児童生徒数及び教職員数は、

☆児童生徒…88名 教職員…15名 学級数…9クラス

であり、毎年50名程度が増加していることになる。この増加に伴い、開校当時の校舎では教室が不足することとなり、私が赴任した平成26年度からは新校舎が利用され始めている。校舎は設計当初から人数の増加を想定しており、増築のためのスペースや、その図面もすでに完備されている。ただ、日本企業のアジア進出は少しずつ近隣国にシフトしてきており、今後どのような変化をしていくのかを想像するのは容易ではない。



## (3) シラチャ日本人学校の特色

### ①土曜登校日

学年によってその数は異なるが、月に1～2回の土曜登校日が設定されている。その目的は授業時数の確保と、土曜参観日を設定することで父親が子育てに参加できるようにするためである。土曜登校日は午前中に3時間を行って下校となる。

### ②タイ語

シラチャ校はタイの政府に認められたタイの私立学校という性格を有しているため、タイ教育省によってタイ語の授業が義務づけられている。実施は全学年週に1時間で、タイでの生活に役立つ日常会話やタイの文化を体験的に学習する。指導は日本語が堪能なタイ人の教師が行っており、楽しみながらタイ語に触れることができる。

### ③英会話

小学部の3年生以上で週に2時間実施され、授業の中では基本的に英語しか使われない。指導は3人のネイティブスピーカーが行い、赴任最終年度はアメリカ、オーストラリア、南アフリカ出身の3人が講師だった。

### ④水泳

常夏の気候を生かし、毎週1時間の水泳授業が実施される。北海道とは比べものにならない環境である。継続した指導が可能のため、培われる泳力は相当に高い。

### ⑤小5臨海学校

2泊3日の日程で行われ、子どもたちが日頃の水泳学習の成果を発揮する場として「遠泳」が設定されている。波の高さにもよるが、平泳ぎで最長1000mもの距離を泳ぎきって帰ってくると、その自信から、ほんの数日にもかかわらず見違えるほどに大きな成長を遂げた子どもたちの姿が見られる。

### ⑥修学旅行

小6はタイの古都チェンマイへ行き、タイ北部の歴史を学んだり、現地校との交流を行ったりする。中2は近隣国まで足を伸ばし、タイとはひと味もふた味も違った文化を学んでくる。右の写真は小6の修学旅行の様子であるが、日本では考えられないような体験や学習が可能である。



## IV 現地理解

### 1. 校外学習

日本では、社会科や生活科の学習で校外学習へ出かける機会が多いが、海外では自由にどこへでも行けるというものではない。在外教育施設によっては、そのあたりに難しさを感じているところもあるのではないだろうか。シラチャ校ももちろんそれは同じではあるが、タイの企業や施設、日系企業の協力により、驚くほど校外学習の中身は充実している。2年生の乗り物学習、3年生のスーパーマーケット、4年生の水道、5年生の自動車工場、中学部では職場体験学習も受け入れてもらっている。その行き先については少しずつ磨きがかかれ、年々充実したものになっている。

### 2. 交流学習

現地校との交流学習を、小・中学部ともに年に1度、相手校におじゃまする年とこちらに来てもらう年とを設定して行っている。年にたった1度の交流ではあるが、その中身の充実度合いは素晴らしく、我々教職員も子どもたちも本当に心から楽しみにしている行事である。

#### ①開会式

両校の子どもたちの出会いの場である。右の写真は、現地校に行ったときの様子だが、会場いっぱいに折り鶴が飾られているのがわかるだろうか。相手校の先生方や子どもたちが我々を歓迎するために準備してくれたのである。こういった取組は互いに年々進化していて、相手を思う気持ちの深さを感じる。開会式では両校の代表児童のスピーチもあり、それぞれに相手の国の言葉でスピーチをするなど、素晴らしい出会いの場となっている。



#### ②ペアとの出会い

一人一人の交流の深まりを大切にしようということで、交流会では1対1のペアを作っている。事前に互いの写真を送り合ったり、名刺を作っておいて交換できるようにしたりと、事前学習の段階から子どもたちの気持ちを盛り上げ、交流学習会の成功につなげている。

#### ③学年交流

各学年の交流では、日本の文化とタイの文化を通じて互いの交流を図っている。相手校からはム

エタイ、タイダンス、楽器や遊び、こちらからは折り紙や組体操、福笑いやぶんぶんごまなど、それぞれの子供たちが考えて準備してきたものを通じて交流を図っている。言葉はもちろん、身振り手振りも加えながら思いを伝え、相手の思いをくみ取ろうとする姿からは、これから先の未来を生きる子どもたちにとって必要なコミュニケーション能力の高まりにつながる様子がたくさん見られる。願わくばずっとこの時間が続くといいのに、と思わされる時間である。



### ③交流弁当

タイには“お弁当を作る”という文化は存在しない。したがって赴任した1年目の交流会で目にしたのは、お店に注文した昼食を食べる相手校の子どもたちの姿であった。しかし、2年目の交流会では、なんと相手校の子どもたちは全員お弁当持参だったのである。相手校の先生に聞くと、事前に保護者をお願いをし、交流会のためにお弁当を作ってもらったということであった。些細なことではあるが、これは相手校が日本式のやり方のよさを取り入れてくれたことの一環である。前述の会場の飾りやお弁当、その他にも教職員による事前打ち合わせの充実や時間の管理など、相手校がこちらのやり方を柔軟に取り入れてくれている姿を感じ、大人のレベルでも国際理解が深まっていることを痛感した。いつもにこやかに私達を受け入れてくれた相手校のディレクターや先生方が懐かしくてたまらないこの頃である。



### ④閉会式

閉会式では再び全員が一堂に会し、別れのセレモニーが行われる。そのハイライトは全員で歌う『思いやりの花』である。この歌はタイ語と日本語とが混ざった歌で、タイでもよく知られた歌である。互いに手をつなぎながら体育館にいる全員が一生懸命に歌う姿には、毎年目頭が熱くなった。国境を越え、言葉を越えて心が通い合い、思いが一つになる素晴らしい瞬間であった。

☆

☆

☆

この他にも、教職員の研修として毎年現地校を訪問して交流授業を行ったり、日系企業訪問を行ったりした。また、プーケットにある補習授業校を訪れて授業を行ったり、補習校の児童を体験入学で受け入れたり等、現地理解の取組として紹介したいことは山ほどあるが、紙面の都合上、今回はここまでとしたい。

## V おわりに

たくさん子どもたちが海外で学んでいること。そして当然ながらそれだけの保護者が海外で勤務をしていること。北海道の十勝にいる間には、想像はしていたもののその実際についてはおおよそ何も理解できていなかったのだということを感じた3年間であった。今後、グローバル化がますます進み、子どもたちが生きる未来を想像することすら難しいような時代になることが予測されるが、日本人学校の子供たちが学校や生活の中で肌身で感じたことが、日本の将来をよりよいものにしていくためにきっと役立つのではないかと感じている。また、在外教育施設はそんな未来の担い手を育てていくことが重要な責務なのだと思う。タイの生活で感じたこと、タイの人と接して感じたことを糧とし、子どもたちがたくましく未来を生きてくれることを強く願う。

さて、派遣の3年の間には、日本にいる知人から何度も「大丈夫か？」と連絡をもらうような大きな出来事が2つあった。その1つはタイ国の軍によるクーデターで、もう1つはタイ国王の崩御である。どちらも国を揺るがすような大きな出来事であったが、どんなときでも安心して現地での生活を送ることができたのは、タイの人たちの温かさがあったからこそである。現地地で出会ったタイの人々、そして共に汗を流して教育に携わった教職員をはじめとした日本のみなさん、その他3年の間に会った全ての人に感謝申し上げ、今回のレポートを閉じさせていただきます。